「教科書検定」結果発表
ページ増える

学校で使われる教科書の中身をチェックする「教科書検定」の結果が発表されました。検定は、小中高校で使われる教科書で毎年、順番に行われています。今回は来年の春から、主に高校１、２年生が使う教科書を調べました。今の教科書に比べて、ページが大きく増えたのが特徴で、平均で１２％、数学は２７％、英語は２５％も増えて分厚くなりました。

日本には、教科書作りを専門にしている出版社がいくつもあり、同じ学年の同じ科目でも、教科書にはたくさんの種類があります。ただ、勝手に教科書が作られると、内容などがバラバラになってしまいます。このため教科書は学校で何をどれだけ勉強するかを国が決めた「学習指導要領」をもとに作られることになっています。教科書検定は、要領に合っているかを確かめるために行うのです。

では、今回の検定を受けた教科書のページが増えたのは、なぜでしょうか。それは、２００９年にできた新しい指導要領では、それまでの指導要領に比べて、学校で教える内容を増やして、難しくしたからです。

例えば、英語では高校３年間で勉強する単語が１３００語から１８００語に増え、数学でも曲線の長さを求めるなど、レベルの高い内容が加わりました。こうした複雑な中身を盛り込むため、ページが増えたのです。教科書が難しい内容になったのは、「ゆとり教育」が見直されたからです。

これまでの指導要領をもとにした、教科書や学校での授業は、簡単すぎて「ゆとり教育」と呼ばれるこの１０年ぐらいの間に、日本の子どもたちの学力が下がったとされています。世界の１５歳を対象にした国際学力調査（ＰＩＳＡ）では、「読解力」の国際順位が２０００年の８位から０６年には１５位にまで下がり、教育にかかわる人たちの間で危機感が広がりました。「ゆとり教育」では子供たちの学力格差も広がりました。教科書会社は、教科書をやさしいものから難しいものまで、レベル別に複数作るようになっていて、今回もバラエティーにとんだ内容の教科書が出そろいました。

例えば、英語では、基礎的な教科書はアルファベットの書き方を復習したり、「Ｉａｍ～」を使った自己紹介から始まっていたりします。でも、進学校向けのものは、環境問題などの難しい英語長文を扱っていて、日本語がほとんど使われておらず、まるで別の教科書です。理科や数学でも、大学受験向けに例題を充実させる教科書がある一方、イラストや図をたくさん使って、説明をやさしく長めにした教科書もあります。

2012年4月10日　読売新聞

東大が秋入学を検討

日本では入学式は４月、桜の咲く春に行われます。しかし世界では、多くの国で入学は秋がふつうになっています。そこで東京大学では５年後の新入学生から、入学の時期を秋に変えようとしています。将来は日本でも秋入学がふつうになるかもしれません。アメリカやイギリス、中国など、世界の主な国々では、入学時期を秋にしている大学が多く、日本のように春に入学式があって新学期が始まる国は少数です。

外国の大学と新入学時期が異なっていると、学生の行き来が難しくなります。東大生が「海外に留学したい」と思っても、その国の新学期が秋なら半年待たなければなりません。逆に、海外で学ぶ優秀な学生が東大に留学しようと考えても、やはり半年待つことになります。このようなずれが壁となって、東大は外国の大学に比べて、留学生が少なくなっているといいます。

日本ではトップクラスの学生が集まる東大ですが、イギリスの情報会社が作った世界の大学ランキングでは２５位どまりで、同じアジアの香港大よりも評価が低くなっています。その理由は、外国の大学は高い研究水準を保ち続けるために、ほかの国から優秀な学生をどんどん集めているのに対して、東大は後れを取っているからだと言われています。そこで、東大も秋入学にして世界の優秀な学生を獲得し、大学のレベルを上げようとしているのです。日本の企業も、「世界で活躍できる学生を育ててほしい」と求めています。

ただし、秋入学を始める場合は、解決しなければならない問題がたくさんあります。

東大は秋入学にしてからも入学試験は今とかわらず冬に行う予定です。そうすると、合格してから入学まで半年の空白期間が生じてしまいます。

東大は、その半年間を活用して、短期留学やボランティア、仕事を体験する「インターンシップ」など、様々な経験を積んでもらおうと考えています。大学に入学してからはなかなかできない体験をすることで、より広い世界を知り、学生に大きく成長してもらうことが狙いです。

秋入学になったら、卒業も夏になって、就職までに半年空いてしまう問題もあります。日本の多くの企業は現在、「３月に卒業する学生を４月に入社させる」という方針で社員を採用しています。夏に卒業すると、こうした企業のスケジュールに合わず、就職活動で不利になる恐れがあります。医師や公務員になるための試験や司法試験なども、大学生が春に入学して春に卒業することを考えて日程が決まっています。大学の入学時期が変われば、小中高校の教育にも影響が及ぶなど、国内では様々な問題が心配されています。

しかし、これからは世界に目を向けていかなければならないとして、東大は秋入学に本気で取り組むつもりです。実現には社会全体の協力が必要なので、ほかの大学や企業などにも加わってもらって、よりよい方法を検討していくことにしています。

(2012年1月31日　読売新聞)

外国人の「介護福祉士」試験

お年寄りをお世話する「介護」という仕事をしようと、インドネシアとフィリピンから日本にやって来た外国の人たちが、「介護福祉士」という資格を取るための国の試験に初めて挑戦し、３６人が合格しました。この試験に受かると、お世話のプロとして、責任のある仕事をせてもらえるようになります。日本ではお年寄りが増えて、お世話の仕事をする人が足りなくなるので、外国の人たちがたくさん合格してくれるといいのですが、試験に受かるまでは大変なようです。

日本は、介護福祉士や看護師になりたい、と希望しているインドネシアの人を２００８年度から、フィリピンの人は０９年度から受け入れています。この二つの国と、モノや人が自由に行き来できるようにして、一緒に発展していこうと「経済連携協定」という約束を取り交わしたからです。これまでに介護で約８００人、看護で約６００人が日本に来ました。

介護福祉士を目指している外国人は、全国の介護の施設で働き、お年寄りの食事やお風呂などを手助けする技術を身につけながら、日本語や試験の勉強をしています。日本に滞在できるのは４年間で、試験に合格すればそのまま働き続けられますが、不合格だと帰国しなければなりません。

受験するには、日本の介護施設で３年以上働かなければならないので、日本に４年いてもチャンスは１回だけという厳しい仕組みです。今回、初めて９５人が挑戦したのですが、日本語で出題される試験問題を解く難しさなどから合格率は３８％と低く、日本人を含む全体の合格率（６４％）を下回りました。看護師を目指す外国人が受験した試験でも、過去４回の試験で合格したのは計６６人しかおらず、大勢が帰国しました。

介護福祉士の試験問題は、日本語の力だけでなく、日本の医療や年金の仕組みのほか、お年寄りの病気の知識なども問われます。外国人が試験の

問題を理解しやすいように、一部の難しい漢字にひらがなのルビを振り、病気の名前には英語も並べて書くなどの工夫もしましたが、やはり難しかったようです。

日本の政府は、今回の不合格者のうち、悪くない成績だった人について特別に、希望すれば１年間、滞在期間を延ばして来年も受験できるようにしました。ただ、外国の人がもっと合格できるように、さらに手だてが必要だ、という声が高まっています。試験に合格したインドネシア人のチトラ・ファレンティーンさん（２５）は「教科書は漢字がいっぱいで、最初は読めないし、意味も分からなくて困った」と振り返ります。毎日、日本人の仕事仲間と一緒に勉強し、日本語教師にも教わって力を付けたそうです。「これからも介護の仕事を続けたい」とやる気満々です。

お年寄りが増える一方の日本では、介護が必要な人が増えていて、現在１４０万人いる介護職員を、２０２５年までに、９０万人以上も増やさなければなりません。外国人の熱心な働きぶりは高く評価されています。やる気のある外国人が日本で活躍できるよう、手助けが必要です。

(2012年4月17日　読売新聞)